

2 地域史の中の雲部車塚古墳—まとめと展望—

雲部車塚古墳は兵庫県下第2の規模を誇る大型前方後円墳で、丹波地方だけでなく、兵庫県を代表する古墳の一つである。しかも内部構造や遺物、出土状況など、不明な点が多い中期の大型古墳の中にあつて、未盗掘の状態で見つかった貴重な資料である。発掘の様子は絵図や文字によって記録され、竪穴式石槨の中に長持形石棺をもつ典型的な中期古墳であることが判明し、現存する遺構、出土遺物はもちろんのこと、今では記録された絵図、文書資料も含めて貴重な文化遺産である。

現存する確実な発掘調査資料としては、宮内庁書陵部がおこなった墳丘出土の埴輪・須恵器がある〔徳田ほか2006〕。面的な調査ではないにしろ、古墳を相対的に位置づける際に欠くことのできない埴輪と須恵器が、当墳に確実にともなうものとして資料化され、検討されている（第4章第7節）。その結果、埴輪は誉田御廟山古墳にやや後続する時期であると結論づけられている。ここで得られた成果は当墳を各地の古墳と共通の時間軸の中で位置づける際に重要な役割を果たすことになろう。ただし、注意すべきは、雲部車塚古墳には埋葬施設が2基存在する可能性がある点で、1896（明治29）年に発掘された資料と、古墳の築造時期を示す埴輪・須恵器が、同時期とは限らないことである^{註1}。

また、京都大学総合博物館で保管されている遺物の一つである馬具が当墳にともなわない可能性が出てきた。『車塚一蒔』などの記録で記されている出土遺物以外は取り扱いに注意を要する。それと同時に、1901（明治34）年の八木契三郎氏による報告〔八木1901〕には馬具の出土が記載されており、この頃には資料の混乱があった可能性もある。今後、同型式の馬具の出現が古くまでさかのぼり、年代の齟齬が解消されるのかどうか、あるいは、馬具の時期まで埋葬施設の時期が下るのかどうか、類例の増加とほかの副葬品や石棺の研究の進展をみまもりたい。

さて、兵庫県内における大型前方後円墳は、発掘調査報告書が刊行された五色塚古墳〔丸山編2006〕、整備や市史編纂にともなつて発掘調査や墳丘測量がおこなわれた加西市玉丘古墳〔立花1990、菱田2008〕、墳丘測量がおこなわれた姫路市壇場山古墳〔岸本直2005〕、平成20年度から大規模に発掘調査をおこなっている朝来市池田古墳などの資料が整いつつあり、埴輪を中心とした出土品と墳形、埋葬施設を含めて、他地域との比較・検討が可能となつてきた。

墳形では、雲部車塚古墳が先の墳丘調査の結果をふまえた上で誉田御廟山古墳や奈良県コナベ古墳との関係が指摘され（第2章第6節）、五色塚古墳が佐紀陵山型、玉丘古墳が津堂城山型、壇場山古墳が仲津山型とされている〔岸本直2005・2008〕。池田古墳については岸本一宏氏の検討がある〔岸本一2008〕が、現行の発掘調査結果との照合が期待される。

これら兵庫県内の大型古墳は盾形周濠をもち、長持形石棺が使用されるという共通性がある。五色塚古墳は不明である^{註2}ものの、玉丘古墳・壇場山古墳・雲部車塚古墳は明らかであり、池田古墳ではその可能性が指摘されている〔岸本一2008〕。一方、槨については雲部車塚古墳が竪穴式石槨であったが、それ以外は石棺直葬である可能性が高い。また、雲部車塚古墳には造出を確認できないことも特徴的である。

このような築造時期、墳丘の形や型、規模、棺槨構造、採用された長持形石棺の形態差などの比較を通じ、倭王権内と地方とのつながりについて検討することも重要な課題である。これら大型古墳は県下各地域において突如として出現した感があり、前期古墳からの流れを読み取りにくく、その出現の背景には佐紀や古市といった大和政権中枢の古墳群の動向と連動している可能性も考えられよう。雲部車塚

古墳が位置する場所は旧丹波国を東西で結ぶ交通の要衝にあたり、園部、亀岡から山城へ抜けることができる。このような視点からも当墳を評価しなければならない。

また、大和政権とのつながりの中で大型前方後円墳を位置づけるとともに、篠山盆地内での検討も必要である。雲部車塚古墳の周囲には、先行する可能性のある古墳として西側丘陵先端に築かれた直径30mの円墳であるイ（飯）塚古墳や、綾部を経て日本海へ抜ける交通路上にある一辺約30mの方墳、北条古墳などが指摘されている。後者については埋葬施設が粘土槨で、墳丘から出土した靱形埴輪片が室宮山古墳出土資料と類似していることからこれと同時期と考え、雲部車塚古墳よりさかのぼるものとされている〔池田1994 p.243〕。これらの実態は明らかではないが、地方における大型前方後円墳出現の様相についても検討しなければならない^{註3}。

以上、残された課題は多いが、このような検討が可能であるのは、『車塚一蒔』をはじめとする雲部車塚古墳の研究に欠くことのできない記録を取り、それらを残し、そして現在まで伝えてきた地元篠山地域の先人たちの賜物である。最後ではあるが先人たちの絶え間ない努力に対し敬意を表したい。

(中村 弘)

〈註〉

- 1 長持形石棺を有し、2基並存する前方後円墳には、ほかに室宮山古墳がある。また、壇場山古墳についても現在石棺がやや偏った場所にあるため、もう1基の埋葬施設が存在する可能性がある。
- 2 1762(宝暦12)年頃に成立した『播磨鑑』に「石棺」と記載されているのは、五色塚古墳のものであると考えられている。
- 3 高井健司氏によると北条古墳は「Ⅱ式」の埴輪をもつため、時期的にやや離れている〔高井1992 p.52〕。また、池田正男氏は亀岡盆地に多く築造される方墳の影響のもとに北条古墳が築かれ、そして「京都丹波からの古墳文化が雲部車塚古墳を築くようになった」としている〔池田1994 p.243〕。

〈参考文献〉

- 池田正男 1994 「地方政権の誕生」『丹南町史』上巻 丹南町 pp.221-298
- 岸本一宏 2008 「池田古墳をめぐる若干の検討」『王権と武器と信仰』同成社 pp.158-171
- 岸本直文 2005 『前方後円墳の築造規格からみた古墳時代の政治的変動の研究』平成13年度～16年度科学研究費(基盤研究B)研究成果報告書 大阪市立大学
- 岸本直文 2008 「前方後円墳の二系列と王権構造」『ヒストリア』第208号 大阪歴史学会 pp.1-24
- 高井健司 1992 「西丹波」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社 pp.50-53
- 立花 聡 1990 『玉丘古墳—史跡保存整備国庫補助事業に係る調査整備報告—』加西市埋蔵文化財報告4 加西市教育委員会
- 徳田誠志・有馬 伸・加藤一郎 2006 「雲部陵墓参考地埴輪裾護岸その他工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第57号 宮内庁書陵部 pp.29-61
- 菱田哲郎 2008 「玉丘古墳群」『加西市史』第1巻 本編1 考古・古代・中世 加西市 pp.48-57
- 丸山 潔(編) 2006 『史跡 五色塚古墳 小壺古墳 発掘調査・復元整備報告書』神戸市教育委員会
- 八木契三郎 1901 「丹波國多紀郡雲部村の古墳發見品」『東京人類學會雜誌』第17巻第189号 東京人類学会 pp.93-98

報告書抄録

ふりがな	くもべくるまづかこふん けんきゆう							
書名	雲部車塚古墳の研究							
副書名								
巻次								
シリーズ名	兵庫県立考古博物館研究紀要							
シリーズ番号	第3号							
編著者名	有馬 伸・池田正男・石田大輔・加藤一郎・河野正訓・川畑 純・金 宇大・ 阪口英毅・下垣仁志・清喜裕二・多賀茂治・塚本敏夫・徳田誠志・中村 弘・ 吉識雅仁・若杉智宏							
発行機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中 1 - 1 - 1							
発行年月日	西暦2010年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くもべくるまづかこふん 雲部車塚古墳	ひょうごけんさきやまし 兵庫県篠山市 ひがしほんじょう 東本荘 あざくるまづか つぼ 字車塚の坪	28221	820870	35度 5分 13秒	135度 18分 17秒			学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	遺跡の内容	主な遺物	特記事項			
雲部車塚古墳	古墳	古墳時代中期	前方後円墳 1基 竪穴式石槨 1基 外周溝	武器 武具 掛具 埴輪 須恵器	・1896（明治29）年に出土した遺物を資料化。			